

炎 かぎろひ)

・薄明の東の空 切裂く燭光・

「炎」と書いて「かぎろひ」と詠む。万葉集、卷一四八にある柿本人麻呂の輕皇子の阿騎野に宿りまし時に詠んだ短歌、

東 むむかし)の野に 炎 かぎろひ)の立つ見えて かえり見すれば月かたゞきぬ」の「かぎろひを観て万葉を偲ぶ会」が毎年、旧暦十一月十七日の早朝に安騎野 現在の奈良県大字陀町で開かれている。尺八のコンサートで始まり、万葉秀歌の朗詠を聞き かぎろひ)の立つ瞬間を静かに迎えて、万葉の昔と人麻呂を偲ぶ悠久のロマンを味わう催しとなる。

西に傾く月と対照的に薄明の東の空に、レザーガンのごとく燃えるような燭光が鋭く切り裂き山々の稜線を染めあげる「瞬を 炎」とあって「かぎろひ」と詠ませた。かぎろひは万葉集のなかでも蜻火や蜻炎とあててふつうは陽炎 かげろう)の意で用いている。

これは俳句の春の季語で地面が暖められゆらりゆらりと空気が揺らぐ現象で、冬晴れの凍てつく安騎野の早朝ではありえない現象である。万葉集のなかでは「炎」でかぎろひと読ませてるのは唯一ここだけで、歌聖といわれた人麻呂が何か別の深い意味を秘そませたと想わざるをえない。

【天麻呂の暗号】 藤村由加著(新潮社)なかでハングル語をどうして解釈するという新しい切り口でこの万葉集のナゾ解きをしている。例

外的になぜ炎をあてたかが鍵をにぎっている。炎、カギロヒは死を暗示するもので、挽歌のかでの隠れたる主人公の草壁皇子と暁の燭光にみる超自然的な「瞬重ね」全体を死のイメージの終末論を重ねているといふ。今年の「かぎろひを観る会」は新暦の十二月十日。現地の観光協会に聞いたところ、今年は残念ながら曇り空で「かぎろひ」見えず仕舞との話だった。